

肥料は有機質肥料か緩効性肥料を用いる。また追肥は、開花時から着果時期が最も肥料吸収が大きいため開花前5日頃より行う。

施肥量		(kg / 10a)		
	N	P	K	備考
基肥	13	32	13	
追肥	20	15	20	
全量	33	47	33	

3 播種

1月上旬より播種を順次行う。畦幅1.5～2m、条間40cm、株間35cm、1穴2～3粒播く。発芽適温は20～25℃以上と高いため、播種後植え穴に保温資材（ポリやビニル等）をべたがけし地温を確保する。立枯病予防のため薬剤を1株当たり1～2g処理する。発芽後は過湿状態にしないようにし、補植苗をポリポットに用意しておく。

4 播種後の管理

GA処理：茎の伸長（ハウス促成を参照）

(1) 温度管理

昼間温度適温23～26℃

30℃以上では、花粉の稔性が悪くなり落花・落莢・曲がり莢の原因となる。40℃以上で生育障害を起こす。

夜間温度適温15～17℃

13℃以下の低夜温では花がだらだら咲き花粉の稔性が悪くなる。落花・落莢・曲がり莢の原因となる。10℃以下で生育を停止する。

最低温度15℃を確保する。

地温適温22～23℃

根毛の伸長最低温度は13～14℃。8℃で枯死するため15℃を確保する。

15℃以下30℃以上にならないようにする。

春の高温時は白寒冷紗等で気温を低下させる。

(2) 換気

多重被覆下では40℃以上になりやすいためこまめな管理をおこなう。トンネル、カーテンは午

前中の光線を確保するため、温度を確保できたら早めに開ける。

(3) 水管理

灌水は本葉2枚期以降より行う。土壌と天候を見ながら5～7日おきに3～5mm灌水する。植壤土での適水分はPF1.5～2.0程度である。晴天日の午前中に行い、冷たい水で地温を低下させないようにする。灌水むらのある株は手灌水を行う。

前日曇天で湿度が高く、当日朝から晴天で急激に光線が入り込む場合は、葉焼けを生ずる場合があるため注意する。

(4) 誘引・摘葉

誘引は必ず行い、光線の確保と養分の転流がスムーズに行われるようにする。

混み合う葉や病葉・老化葉は早めに摘葉を行い株の内部に光線を当てる。1度に多くの摘葉を行うと樹勢が低下するため行わない。

5 収穫

開花後14～20日の若莢（12～14cm）を中心に収穫する。こまめに収穫を行い株に負担がかからないようにする。